

---

**星は鳥と歌う。**

空氣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星は鳥と歌う。

### 【Zコード】

N3178E

### 【作者名】

空氣

### 【あらすじ】

星はとても綺麗。なのにぼくだけは綺麗じゃない。自分で光ることもできない。自分を探す星のお話。

ぼくは星。

いちめんのくろい絨毯にきらきらと輝くぼく。

でもひとり元気のない、ぼく。

なんでぼくだけあまりかがやけないんだ？

みんなと同じようにきらきらとしたいのに。

ぼくは星なのに。

したをみるとみんなを観察しているにんげんたちがいた。

「ほら、じりん。みんな綺麗に輝いてるね」

そのみんなに僕は入ってはいないんだ。

なんでぼくだけ見てもう見えないんだろう。なんで僕はみんなとちがうんだろう。

ぼくだけほしながら。

かなしくてなみだがでる。ぼくだけ星なんだよ。認めておくれよ。かなしくてきょうも一人なかまはずれ。

またひとりのよがすぎていつた。

今日は早起きをした。みんなはまだ眠っている。  
ぼくだけが目を覚ました。

「そうだ、今ならぼくに気付いてくれるかもしねない」

ぼくはまだ薄明るい空に一人ですがたをあらわした。  
まわりをみてもぼくだけしかいない。

みんな気付いておくれ。ぼくだけきらきらかがやいてるよ。  
だんだんと暗くなる空の中、だれも僕に気付いてくれなかつた。  
みんなも起き始めて輝きだす。

またぼくは田立なくなつた。

「どうしてぼくはほしなんだり。

「どうしてぼくはほしなんだり。

本当に星なのだらうか。

お月様に聞いてみよう。

お月様のところに向かつて飛んでいった。

「あ、流れ星。でもあんまり綺麗じゃないね」  
にんげんの声が聞こえた。

やつぱりぼくはほしじゃないのかな。

「お月様、どうして僕はみんなとちがうの？」

お月様はこつもこつにみんなを見ている。

「どうしてそり思つ？」

お月様はこつこつして僕に問つ。

「ぼくは星ぢゃないから？」

ぼくはほしじゃなくて本当はもつと別の何かのかなとおもつた。

「じやあ探しておいで。本当のきみを」

お月様はこつこつまた他の星達を眺めはじめた。

そうか、探せばいいのか。ぼくはほんとの僕を探しに行つた。

どこから探そうか。

あてもなく彷徨つてると雲に出会つた。

他の星達の輝きに反射して雲の形がはつきりと見える。とても大きく、そして美しく。

自分では光つていない。ぼくと同じだ。

ぼくは雲なのかもしれない。

「へもれん。ぼくは雲なのかな」

雲さんはもじもじとした口調で答えた。

「きみが雲なわけないよ。だつてきみはもじもじじゃないだら？」

「そつか。ぼくはもじもじじゃない。だからくもじやないんだ。」

残念な気持ちでまた彷徨つた。

遠くから見た雲さんは自分で光つていないのでとても綺麗に見えた。  
ぼくと同じだとおもつたのに。

今度はたかいたかい山に着いた。

その山のてっぺんに大きな木が立つていた。

そうか、ぼくは木なのかもしれない。

「木さん。ぼくは木なのかな」

木さんはとてもきりきりとした口調で答えた。

「きみが木なわけないよ。だって飛んでいるじゃないか」

そつか。ぼくは飛んでいる。だから木じやないんだ。

暗い気持ちでまた彷徨つた。

近くで見た木さんは風を受けて自分の葉を舞わせて踊つていのよつ  
でとても綺麗に見えた。

ぼくと同じだとおもつたのに。

いぐり彷徨つても本当のぼくはわからなかつた。  
なんにちもなんにちも過ぎた。

ぼくの横を鳥さんが飛んできた。

「星さん、星さん」

星さん？ 最初はだれのことかと思つた。

「え、ぼくのこと？」

「やうだよ、君しかいないでしょ」

ぼくは星じゃないのに。

「わたし、星になりたいんだけどどうすればなれるのかしら」

星じゃないぼくに聞かれてもわからないよ。

そう答えると鳥さんは

「なんできみは星じゃないの？」

「さく不思議そうな顔で聞いてきた。

そんなのぼくが知りたいよ。

星じゃない理由を教えてよ。  
どうしたら星になれるのさ。  
ぼくだってしりたいよ。

「あ

ぼくは気付いた。

ほんとうのぼくを探していたんじゃなく  
ぼくは星になる方法を探してたんだ。

「ぼくも星になる方法をしりたい」

鳥さんはうれしそうに

「じゃあ一緒にさがしましょ」

ぼくはとつさんと一人で星になる方法を探した。

なんなんもなんなんも過ぎた。

二人でずっと一緒に探したけれど、星になる方法は見つからなかつた。

いろいろ聞いたけど、ぜんぜんわからなかつた。  
やがて鳥さんは長旅で疲れたのか

ちょっと休むね、といつて目を閉じた。  
そしてその目はもう開くことはなかつた。

ぼくは鳥さんのお墓をつくった。空につくつた。  
また一人になつた。その場から離れた。

遠くからみたそのお墓はまるで星のようになつた。

「さうか、鳥さんは星になれたんだね」  
ぼくはなんだかすこく満足した。

それで僕も眠くなつたんだ。

周りの星達も起きだして、鳥さんのお墓を見て寄つてきた。  
ぼくは眠つて見えなかつたけど、下から声が聞こえた。

「パパ、見て。お空がすごく綺麗だよ」

「本當だ。まるで星の鳥だな」

「みんなすこく綺麗だね」

そのみんなの中にぼくはない。

でも星になりたかった鳥さんはちゃんと入っている。

それだけで嬉しかったんだ。

ぼくはとてもうれしかった。

だからもういいんだ。

ぼくはなんでも。

たつた一人のともだちが星になれたんだから。

ぼくは泣いていた。

涙がとまらなかつたんだ。

その場に居られなくて離れた。

「パパ、綺麗な流れ星」

なみだがみんなの光に反射してとても綺麗に光つた。

「すう」いな、本当に美しい」

そうか、ぼくはなれたんだ。綺麗な星に。

ぼくは星。

いちめんのくろい絨毯にきらきらと輝くぼく。

でもひときわ元気のない、ぼく。

でもみんなのおかげで輝く星になれた。

だれもが認めるきらきら星に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3178e/>

---

星は鳥と歌う。

2011年1月20日03時43分発行